王奇希日本人満州引揚者を描く
王奇希「一九四六」宮城展を見て思う

菅原　順一

2019年10月1日～６日、宮城県立美術館県民ギャラリーで中国の歴史画家、王希奇氏の巨大絵画「一九四六」の展覧会があった。

王氏は、中国で魯迅美術学院油絵学部に勤め、東洋絵画と西洋絵画を融合させた独特の画風で知られた画家。縦3m×横20mという巨大な油絵「一九四六」は、およそ3年半かけて完成させたこの歴史絵画である。この絵は2017年東京都、2018年舞鶴市（京都）での展覧会があって、今回の宮城展は国内3回目となる。

作品を見て、その巨大さと重厚な表現力に圧倒された。王氏の説明を受けながら絵を見ることができたが、王氏の人間愛と平和への熱い思いが伝わってきた。以下に絵画展の様子を紹介する。

美術館のギャラリー1と２に合計20点の絵が展示されていた。ギャラリー1室には縦2m×横8,4mの港の波を描いた絵が2点、波の絵が4点、50号ぐらいのぼやけた風景の絵が6点、いずれも油彩画が展示されていた。

写真　波の絵（左：葫芦島港、右：舞鶴港）

ギャラリー2室に入ると、正面の壁いっぱいに、縦3m×横20mの巨大絵画、帰還の港「葫蘆（ころ）島港」に旧満州各地から、ようやくたどり着いた人たちの無数の群れ（約500人）が克明に描かれていた。

大きな荷物を背負った家族、赤ん坊を抱えた女、遺影を取り出して語りかける人、遺骨を首にかけた子ども、子どもを背負い松葉杖で急ぐ人、担架を担いだ従軍看護婦たち。さまざまなドラマを群衆の中にスポットで浮きあがらせたように描き出す。左から右へとゆっくりとそのドラマを見ながら歩く。20mを横切り、20mを戻り、さらに右上の帰還船までもう一度歩くと60m歩いたことになる。

王氏は言う、「人はものを考える時、ゆっくり歩きながら思索することが多い」。このテー

写真　油絵「一九四六」の全体図（縦3m・幅20m）

写真　油絵「一九四六」の一部分

マを絵にするとき、10mでは足りず、20mが必要だと考えたという。王氏と絵の前を歩いていて、この港にたどりつきたくともたどり着けなかった無数の人たちがいただろうという話が出たが、王氏はそれも絵の中に描き込んでいた。帰還船に急ぐ群衆の奥に遠近法からすれば異様に背の高い樹氷のような黒い影がいくつも描かれていた。

港の左の船も異様に大きい。これだけのデッサン力のある作家が間違えたはずもなく、それも意図的である。荒野ばかりだった満州からかろうじて生きて港にたどり着いたときの、船は大きく見え、港の臭いや低いエンジン音までもが感じられるようなデフォルメだったにちがいない。

王氏の作家としての思考の奥深さは照明などにもみられた。ギャラリー2室の左を暗くすることで、帰還船に搭乗しようとする右に、視線を誘導しようとする意図があったのかと、感動した。メインの2室は照明を敢えて暗くして、海の１室は明るく調光を演出している。2室で「一九四六」のドラマを見て、明るい1室に戻ると、日本に帰る船の上から見たであろう葫蘆島湾の海、甲板から眺めたであろう波、そして、上陸する舞鶴の港、海はざわめき光輝いていた。

いくつかのぼやけた風景画には「帰路」「記憶」とタイトルが付けられ、いずれも満州進出の時に、日本人が作った駅やビルなどの建造物だという。テーブルの上にも、ボール紙の切れ端に無造作に描かれた古ぼけた写真のような風景が並び、これらはすべて、満州に渡った人たちが目にしたであろう記憶の画像である。　他国を侵略した日本の野望は夢の断片となって人々の脳裏に点滅する。

写真　旧満州時代の建造物の絵

終戦時、満州にいた日本人は約155万人、1946年から3年に渡って葫蘆島からの引揚者は約105万人、そしていまその帰還者たちは、80・90歳の齢を重ね、時間の経過とともにその記憶も、王氏がボール紙に描いたようなおぼろげな記憶となってやがて消えていくのか…。

うがった見方をすれば、この展覧会は単なる美術展ではなく、地球上で今起きている紛

争問題、難民問題と重なり合い、さらに核兵器、原発問題、地球温暖化など、行方も見えない人類そのものが「難民」であったことを暗示している。
　「ノアの箱舟」の神話はそのまま現実となって今に至ってる気がしてならない。
王氏の仕事は、過去を題材にしながら現在の私たちに警鐘を鳴らし続けている。

菅原　順一（1948年　宮城県気仙沼生まれ、彫刻家）

写真　菅原順一（左）、王希奇（右）